

## 中央放射線部

### 1. スタッフ（平成22年4月1日現在）

部長 杉本 英治、仲澤 聖則  
 技師長 増渕 二郎  
 副技師長 神山 辰彦、高草木 浩、柳沢三二郎  
 放射線技師（総数）62名

中央放射線部は、画像診断部（核医学部門を含む）、放射線治療部門の2部門からなる。職員は、放射線画像診断医、放射線腫瘍医、診療放射線技師、看護師、事務職員など、職種が違う総勢100名を越す職員で構成されている。

### 2. 中央放射線部の特徴

#### （1）画像診断部門の特徴

一般撮影、MRI、CTをはじめ血管造影（IVR）など、多種多様な検査を行っている。撮影装置は全てデジタル化への対応が終了し、CRからフラットへの更新も始まっている。常に最新の医療を行うべく変革が進んでおり、画像情報の利用に対する利便性の向上に寄与している。病院情報システムは、今年で6年目となり、すでに機器の更新時期を迎えている。

MRIは平成16年に患者数の増加に対応すべく3台目を設置、今年度は3.0Tの追加導入に向けて準備を進めている。CTは平成20年64列を設置、その他40列1台、16列2台、ヘリカル2台となっており、今年度救急部門の更なる高度化に対応すべくCTの更新を予定している。また3Dへの対応にワークステーションを導入し多くの3D画像を構築している。

その他、マンモグラフィーは年々増加の一途をたどり、乳がんへの関心の高さを示している。また、血管造影撮影においては、平成17年4月より血管内治療部を設置しIVR（InterVentional Radiology）を中心にフル稼働している。

救急部門は、新館一階にありCT、DR、一般撮影と24時間体制での業務を行っている。

子ども医療センターは4年が経過し、放射線機器もMRI、一般撮影装置、X線TV装置が順調に稼働している。

核医学は、ガンマカメラ2検出固定型1台、2検出器可変型1台、3検出器型1台である。検査の種類は多岐にわたるが、骨シンチが45%と最も多く、負荷心筋SPECTと続き、検査全体の7割に達する。最近脳血流統計解析ソフトの活用やMRI・CTとSPECT画像のfusionが盛んに行われている。平成17年12月よりPET-CTが導入され、朝・昼2回のデリバリーによる

18F-FDGのPET検査が開始され、順調に推移している。自由診療でも検査を実施しており、7件/日と予約枠一杯の状態となっている。

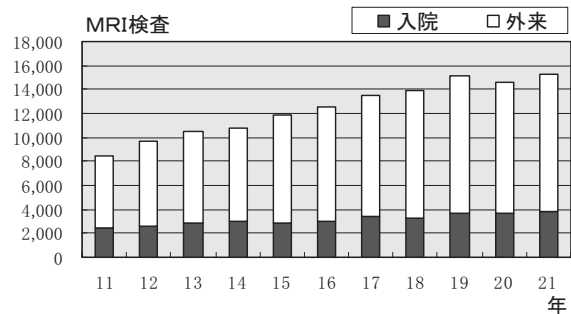
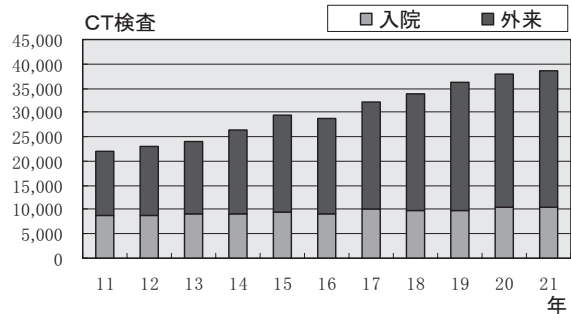
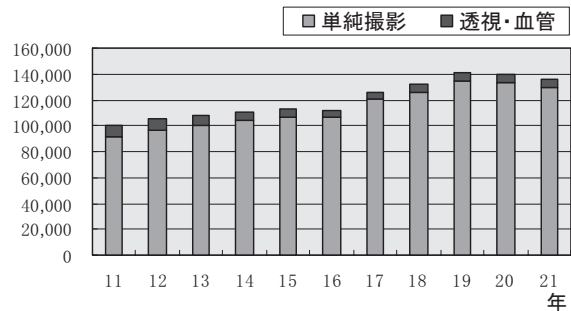
#### （2）放射線治療部門の特徴

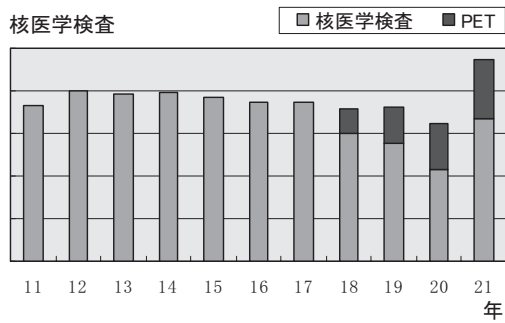
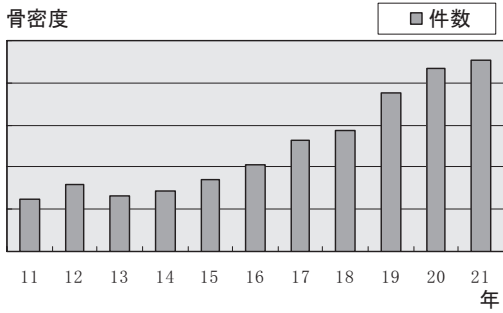
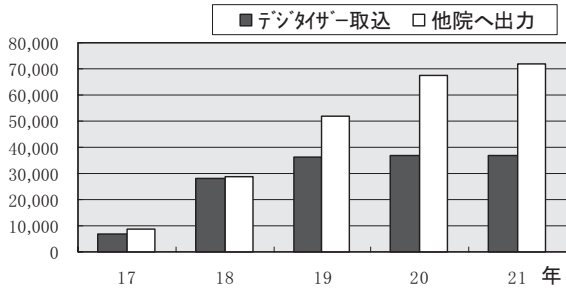
治療部門では平成21年度、旧型のライナックを更新し3台フル稼働に入る。ライナック3台、腔内照射装置（新型コバルト線源）と、4台での治療を行っている。

ライナックでは、全身照射、定位放射線照射（頭部）に加え、20年度より体幹部定位照射（主に肺）、21年度よりIMRT治療（主に前立腺）をスタートさせ、今年度はIMRTの適応拡大のため新たな治療方法の稼働も予定（ラビッドアーク）している。

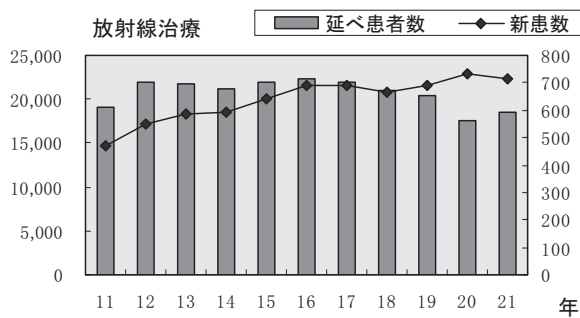
### 3. 実績・クリニカルインディケーター

#### （1）画像診断部門の実績





(2) 放射線治療部門の実績



4. 事業計画・来年の目標等

放射線部門では、安全安心の検査、治療を目標にスタッフの教育・研修を行うと共に、高度医療への貢献が必要と考える。診断部門では、MRIの増設(3.0T)、救急CTの更新を予定している。治療部門では、ライナックの3台体勢の確率、高精度治療への移行を目標に実施していきたい。